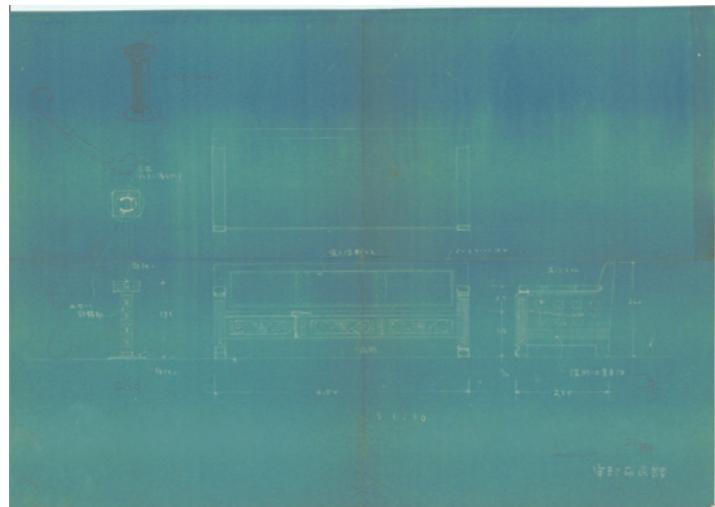


村野藤吾の新出資料について

すでにこの連載でも紹介してきたように、村野藤吾（1891～1984年）は、大阪を拠点に戦前の1920年代から戦後の1980年代にかけて長く活躍し、文化勲章も受章した近代日本を代表する建築家である。京都工芸繊維大学美術工芸資料館では、さまざまな村野藤吾との縁が重なって、彼の没後、その遺族から、数万点におよぶ村野藤吾の膨大な数に及ぶ図面資料の寄贈を受けることになった。こうして、1994年に最初の図面が運び込まれて以来、現在に至るまで、その

内容を確認し、所蔵品として登録する作業を粛々と続けている。1998年には、設計原図の整理作業を進める母胎として、「村野藤吾の設計研究会」を発足させた。この会には、本学の教員や学生にとどまらず、村野藤吾に深い関心を寄せる学外の建築専門の関係者も多数加わっており、そのこ



ロビーに置かれた木製長椅子姿図 1/10 (XII-2-28-47)

とによって、未整理状態で運び込まれた図面の内容を精査し、一つひとつ校訂しながら、設計のプロセスなど、村野理解を深める研究を進めることが可能となった。そして、整理作業と研究の成果を広く社会へと公開するべく、1999年から2008年までの毎年、全10回にわたって、「村野藤吾建築設計図展」を開催し、図面資料を通して村野藤吾の魅力に迫ってきたのである。

諸外国には数多く設置されているものの、残念ながら、日本には、建築設計図面などを収蔵し、公開する公立の建築博物館は未だに存在しない。ようやく、関係者の永年の熱意が実を結び、今年2012年10月、暫定的な建築博物館活動へ

向けて、文化庁の所管で、「近現代建築資料館」（仮称）が発足することになった。こうした中であって、本学の美術工芸資料館における村野藤吾建築資料の整理、収蔵、展示という十数年に及ぶ一連の活動は、建築博物館の先駆的な役割を一定程度担ってきたといっても過言ではない、と思う。

さて、そうした中で、これまで収蔵庫に別置きとなっていた段ボール箱5箱の中から、今回、新たに、構造計算書などの書類に混じって、これまで知られていなかった多数の図面が

封筒に折りたたまれた状態で見つかった。その数は、1000枚を超えている。そこで、これらの新出資料の中から、際立った特徴を持つ12の作品に焦点を当て、その豊かな細部や村野ならではの創造の世界に迫るべく、2012年、第11回目となる村野藤吾の建築展「新出資料に見る村野藤吾の世界」展を開催

することになったのである（会期：2012年2月6日～5月6日）。

新出資料の大半は、いわゆる戦中期に設計された、村野の中でも従来あまり知られていない時期の建築が占めている。しかし、その図面からは、戦中期も精力的に仕事に取り組み、村野の特有の豊饒な世界を構想し、図面上で推敲を重ねた様子が伝わってくる。また、これらの新出資料には、過去の展覧会で紹介された建物も数多く含まれており、あたかも、ジグソー・パズルの新たなピース（断片）がそこに加わることによって、設計のプロセスを知る大きな手がかりがまたひとつ増えることにもつながっている。

今回紹介するのは、こうして発見された新出資料のほんの

一部だが、山口県宇部市にある「宇部市民館」の設計図である。同館は、1937年、日中戦争の始まる直前に竣工した。戦前の宇部の隆盛を今に伝える建築であり、村野の戦前の代表作として知られている。戦火にも耐え、戦後は、人々の心のよりどころとして長く親しまれてきた。

2005年には、村野の建築としては初めて、国の重要文化財にも登録された。ここに掲載するのは、新出資料に含まれていたもので、ロビーに置かれた重厚な木製の長椅子と、独特の光と形で客席に華やかな印象を与えているペンダント型の照明器具の図面である。この長椅子と照明器具は、いずれも、今もなお、当たり前のように現役で宇部市民に普段使われている。その意味では、すでに75年という長い年月を市民と共に歩んできた木製の長椅子や客席の照明器具の図面が見つかったことは、いわば、75年の時間を一気に飛び越えて、その誕生の瞬間を記録した証拠品が出てきた、と言うこともできると思う。逆に言えば、75年という年月、宇部市の人々は、それらを大切に守ってきたことになる。少しだけいいので、そのようなことを想像してみたい。すると、これらの図面が、もちろん描いた人もこの世にはいないけれど、時を越えて、作り手たちの思いを今に伝えてくれる、タイム・カプセルのようなかけがえのない存在であることに気づかされるのではないだろうか。時代は移り行き、町の姿も変わり、建築の生命も永遠ではあり得ない。そう考えると、図面が持つ建築文化を伝える意味の大きさもまた見えてくると思う。

もちろん、この建物だけではなく、近年、村野藤吾が遺した

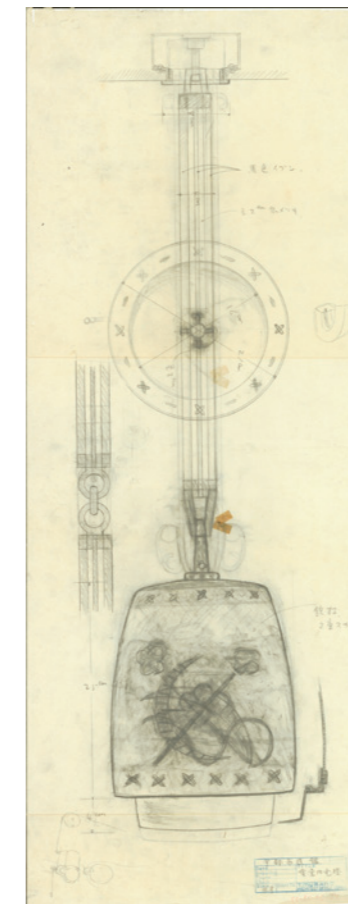
建築作品は、国の重要文化財指定が相次ぐなど、文化遺産として高い評価を受けつつある。また、今回取り上げた「加納合同銀行本店（現・北國銀行武蔵ヶ辻支店）」（1932年）に見られるように、保存活用も積極的に進められるようにな

った。この銀行は、隣接する市場の再開設計画に伴って、一時は全面解体の危機にも遭遇した。それでも、関係者の尽力で、曳家することによって存続させる方針が決定され、2009年3月、建物内部は一部を美術ギャラリーや喫茶店に改装されて、見事に再生活用が果たされたのである。しかし、その一方で、端正込めて建てられた村野の建築においても、解体の危機に瀕しているものも複数存在し、比較的近年の作品でさえ、すでに解体されてしまったものや、内部を中心に大きく改装されてオリジナルの姿を留めていないものも多い。

このような現実を前に、昨年、現存する建築については、その現状をよりリアルに伝えようと、本学の教員で、写真・映画論を専門とする市川靖史助教に依頼して、写真の撮り下ろしを試みることにした。これによって、今の時代を生きる村野建築の魅力的な姿を紹介し、図面資料と合わせた相乗的な効果をもつ展示の可能性が見えてきた。

建築図面資料は資料館が収蔵するポスターや絵画が持つような華やかさはない。それでも、村野が遺した建築に注がれた膨大なエネルギーの痕跡を今に伝え、建築文化の大切さを発信できる貴重な存在なのだと思う。これからも、その魅力を多角的に紹介していきたい。

美術工芸資料館教授 松隈 洋



客席の照明器具現寸図 1/1 (XII-2-28-27)